

克己庵維中追善集 『蓮のうてな』

——手銭記念館所蔵俳諧資料(十四)——

伊藤善隆

(立正大学)

摘要

出雲市大社町の手銭記念館に伝来する俳諧資料の中から、克己庵維中追善集『蓮のうてな』(井原昨非坊撰・中西喜朝編、文政四年銚能舎交桂序、橘屋治兵衛刊)を翻刻紹介する。

キーワード・俳諧、美濃派、克己庵維中、三刀屋、橘屋治兵衛、手銭記念館

はじめに

『蓮のうてな』は、三刀屋(現在の島根県雲南市三刀屋町)の美濃派俳人である克己庵維中の追善集である。

維中は、松尾氏で屋号を灰吹屋と称した。手銭記念館学芸員佐々木杏里氏の御教示によれば、松尾氏は、手銭さの子(手銭家七代目有朝妻)の母(みき)の実家である。本書に収録された喜朝の句の前書によれば、維中は「古稀に二つあまれるよはひ」で亡くなったというから、文政四年から逆算して、寛延三年(一七五〇)の生まれであつた

ことが判る。

また、本書の扉に「美濃 徐風庵宗匠監定」、また「雲州三刀屋／井原昨非坊撰／中西喜朝編」とあるとおり、三刀屋の俳人たちは、大社の俳人たちの系統(百羅系)とは別の系統(徐風庵文柳の美濃派)に属していた。しかし、本書には、浦安(百羅息)、野塘(手銭家六代目有芳)が入集している。また、維中・喜朝は、百羅追善集『あきのせみ』(文化二年(一八〇五) 跋刊)、衝冠齋有秀追善集『善花罌粟』(文政四年(一八二二) 跋刊)に句を寄せている。すなわち、両者は俳系の違いを超えて交際していたことが確認できる。

徐風庵文柳(安永元年(一七七二)～天保三年(一八三二))は、美

濃国池田六之井村の人。多賀氏、通称を六左衛門、別号を裏人と称した。美濃派(再和派)の七世道統である古梁坊雨岡の子息で、自身も九世道統(再和派)となった。

美濃派は、四世五竹坊が、安永年中に門人の安田以哉坊と確執を生じ、五世以降は以哉坊の以哉派(雪炊派)と五竹坊の後継者河村再和坊の再和派の二派に分かれた。徐風庵の父である古梁坊は、『桜の首途』(享和三年(一八〇三))の旅の際に、松江・加茂・郡村・亀寫・八代・木次・三刀屋・今市・大津・宍道・大東・松寄下・大社・平田・松江と出雲各地を巡っている。この時に、三刀屋では、維中・東明・直卿・交月・登山・墨後・芝山・其淵・亀六の九名が古梁坊と一座している。

本書は、克己庵維中の伝記資料としてのみならず、出雲の俳人たちの交流の様相を知る上でも重要な撰集である。しかし、目下のところ、本書は、国文学研究資料館ホームページ内の「日本古籍総合目録データベース」には記載がない(令和2年9月26日確認)。ここに翻刻紹介する所以である。

〈書誌〉

書型……半紙本一冊。二二・七cm×一六・二cm。袋綴じ。楮紙。

表紙……香色原表紙。

題簽……原題簽。中央単辺。「蓮のうてな」。

序文……「鈍能舎交桂／文政四己菊月日」。

版式……無辺無界每半葉九行。

字高……一三・九cm(序文一行目「克己庵」温雅にして)を計測)。

跋文……「徐風庵」。

刊記……「蕉門書林／皇都寺町通二條／橘屋治兵衛梓」(最終丁裏)。
丁数……全一五丁(扉一丁、本文一四丁)。

〈凡例〉

翻刻にあたり、句読点、濁点、半濁点を適宜補い、改行を適宜改めた。また、異体字は通行の字体に、片仮名は平仮名に適宜改めたが、原本の書体を残した箇所もある。また、虫損により解説が困難な箇所は□、推定で読んだ箇所は○と示した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「をつけ、()内にその丁数および表・裏(オ・ウ)を示した。

扉の枠は薄茶色、「蓮能臺」(扉表)と円形の枠(扉裏)は薄茶色白抜きで摺っている。

参考のため、原本の図版を末尾に示した。

〈翻刻〉

蓮のうてな

(白紙)

┌ (表紙・
見返し)

克己庵追善

美濃 徐風庵宗匠監定

蓮 能 臺

雲州三刀屋

井原昨非坊撰
中西喜朝編

└ (才原)

四季吟 克己庵 維中

入相のかねもなき野や夕霞

これもまた子ゆへの闇や螢狩

人の世に瀕瀨はありて天の川

初雪に下戸ならぬこそうれしけれ

〔一〕
〔ウ〕

克己庵のあるじ維中叟は、温雅にしてほまれを得、一郡の長
役をさへかうぶり、上を敬ひ、下を憐み、三十余年職に在て、
めてたく身退き、静に老を養ひ申されき。其つれづれには、
いにしへ今の文を翫味し、俳道に心をゆだね、寂寞に悟道の
眼をひらきて、常にこゝろを正風の深源にあそばしむ。素よ
り、杖草鞋の旅に身をはぶらす〔一〕事を得ざれども、たま
しいは、おのづから吉野、初瀬の花にかよひ、はるかに須磨
更料の月に遊ぶ。棲隠に友を会する日は、厚く世情をあつか
ひ、独座して茶を喫する夜は、ふかく閑をたのしむ。しかる
に、ことし文月のころより、心地例ならず、終に長月はじめ
のひと日、身は蓮の実の飛所といへる一章を残し、其台に〔
二〕のぼり給へば、孝子喜朝はさらなり、予がうからやから
も、ともに悲歎の涙をそへ、幽明異路のわかれをおしみて、
つたなき一句を手向奉る事しかり。
あたらしき白露おがむ仏かな

鉾能舎

交桂

文政四巳菊月日

〔一〕
〔二〕

辞世

歌仙行

世をかへて身は蓮の実の飛所

汲闕伽に影なつかしき月

色鳥も馴染の里に来るらん

弓は袋にうつくしき代や

おもふまゝ、目を遊ばする旅をして

違ひし案にはしき傘

短いといふ内に日は薄くる、

火鉢に壁の染ぬ用心

媚過る兄貴の茶の湯うたてがり

刺つた天窓の角は其まゝ、

追ふて来た敵はまんまと欺れ

茂りにくらし藪の中道

鳥も音を入れてひそかに朝の月

丹波通ひにめるわらんじ

浪人の後碁の弟子を世のたつき

まづはめでたい文字に改元

いざなふて花を咲かする雨のはれ

見るもいさまし糶の生口

笠も気も長閑に揃ふ伊勢参

くらがりもなき八方の照

迷惑に酒こぼさるゝ新畳

杖のないのはいにし豊都

化すとの睦が専ら広ふなり

克己庵

喜明

交桂

直卿

李明

松華

とも

探翠

李仲

里静

李朝

斧山

一笠

知雀

止水

松濤

南湖

喜扇

松栄

雨竹

桃園

李径

桃伍

〔一〕
〔二〕

〔一〕
〔二〕

ほしの光りのまだ更はず

亀嶋

左迂の方へわりなき忍び逢

芝山

〔ウ三〕

記念の扇詠み歌に泣

野塘

名の山も見せずしとく降つゞき

けん

畑にもならず芒渺々

すて

おしなべて月もてはやす比となり

墨後

行脚戻りて三とせめの秋

喜斎

二葺かへに下手な手伝邪魔がられ

長流

雲も動かで仰な追風

白羽

飼桶にこゝろしづまる放れ馬

松居

おとしたにしたものがふところ

朝鶏

散りし人ひたすらおしむ花の陰

昨非坊

言の葉もけふみな手向艸

浦安

右

〔オ四〕

あまりありけれ。今更生前高恩の数くは、算ふるに指なく、
詫るに口なし。只、ゆめに夢路をたどるばかりに紅涙胸に満、
忙然として前後をわする。

鵲庵

喜朝

〔ウ五〕

身ひとつにしむやいらへも秋の風

初七日

七日たつ塚や露おくあきの風

二七日

花の咲く野もはかなしや秋の風

三七日

喪の袖に紅葉かつちる秋のかぜ

四七日

蓑虫の音も身にしるや秋の風

五七日

夢の世やゆめと日の立初しぐれ

六七日

袖ぬれて闍伽の水汲むしぐれ哉

七七日

けふやまんずる七々日の墓前にうづくまりて

枯る野に塚はふり行時雨かな

〔ウ六〕

秋はじめ露置そめし頃より、面色常ならず、病の床に臥して、元氣日々におとろへ、良薬石針はいふもさら也。かなたの神に祈り、こなたの仏に願ひて、ひたぶる快全を待ぬるが、限れる天の命数にや、無情の秋の風立て、おもき枕をとりも直さず、〔ウ五〕終に菊月はじめの一日、蓮の実の言の葉を残して、ながき別れとなれるこそ、おしみてもかなしみても猶

父の恩は、大海よりも猶深しとぞ。されど我は何一つの寸孝もなくて年月をおくりしが、今更この別れにのぞみて、枕辺に寄り、先非を悔み、断腸の涙をとゞめかね侍る。

長月やながきわかれの夢ごゝろ
悔みても帰へらぬ露の別れ哉

松居
長流

千代もと契る夫にはなれて
君ならで厂かく蚊屋に別れ哉

けん

たらち男の喪にくらして
白無垢のわかれかなしや野は錦

すて

祖父君の喪にこもりて生前の厚恩をおもへば

いかにせん世を秋風の此別れ
野送りや艸よりぬる、袖の露

朝鶏
喜斎

この経はたまちがたく、しばらくも」(七七) たもつものは、

諸仏も観喜し給ふとかや。つらく、維中新霊の生前をおもふに、たましく公勤の寸隙を得ては、成仏得脱の法味を觀

じ、七字の妙音を呪へては、国家の無朽を祈る。或日、ある夜は、祖翁蓮師の腸を探りて、齋家修身の俳諧に社中を

導きもふされしは、ひとかたならぬいさほしにぞありける。しかあるに、」(七八) おしいかな、かなしい哉、この人

に此病愈ず、長月の朔日、蓮の実の吟をのこし、寐入がごとく世を見果て給へば、法名を蓮種院と称し、謹而申ても

ふさく。

蓮の実の飛ぶや不滅の南無仏

僧 柳仲

悼中西維中君

横山直卿

」(七八)

二十年前自卜隣 華晨月夕更相親
雖知会者定離數 今日蒞欄淚湿巾

追善

道の問ひ残す事のみおもひ艸
菊折れて其芳ばしき名のかなし

嗚呼老たりさとらぬ我も菊の蝶
待人の来ぬや今宵の月の隈

七日くいざとぶらはん菊紅葉
あとになほにははし菊の霜ながら

過にし年、維中のぬし訪ひける時、慮橘を折る君がため、

といへる脇句給りて、懇にいたはられけるが、此長月頓に

身まかり給へるよし、亡便りにおどろきて。
橘もむかしにかなし菊見月

深情を尽せる手向の吟のあまたなるは靈前に備へ置て、爰

には四季の吟をあらはす。
長閑さや空に一点昼の月

菜の花の果は靄なる山辺哉
浜風も和らぐ梅のさかりかな

松の火や鹿聞く宿の馳走ぶり
山姫のふところさがす木の子かな

人馴る、寺の男やはな盛り

一笠
墨後
浦安
野塘
昨非坊
松雨

」(七九)

木がらしやとろりと寐れば夜のしらみ

、 松雨

手遊のかんこ鳴り出す夜長かな

、 昨非坊

仏檀へ入日のむかふ彼岸かな

、 応三

夕涼み我がものなる我身かな

、 良久二

花の世にむかしながらのさくら哉

、 浦安

白梅の岸にたふく水の来る

、 野塘

ほとゝぎす家来は先へ寐させけり

、 鳩飛

くらがりのぬかる径や露しぐれ

、 一笠

夕榮や田の漣に啼蛙

、 一圭

何となくあだに茶を焼く寒さ哉

、 滝流

涼しさや河骨うごく細ながら

、 芝山

琴の音の通ふ道あり松の内

、 龜嶋

手車に座頭ものせつ年忘

、 桃醉

四ッ下る艸花店や秋の風

、 汀柳

啼かて飛ぶ明の小鳥や枝の霜

、 桃仙

ふらでもふよいのに何を啼蛙

、 麻岑

白魚や何喰ふてこの肌の色

、 琴吹

魂棚や物ざらひなき仏達

、 菊子

虫飛て立琴一ツならしけり

、 和友

積雪の中や煙りの浅間山

、 甫水

元山に汀た跡や萩の華

、 素笛

菜の花や片側町のそぶり店

、 李暁

梅咲や箒目いれる裏座敷

、 南湖

晚鐘に鸚鵡返しや雉子の声

、 白羽

持土に陽炎わたる土橋かな

鐘の音も松にこもるや夕霞

、 竜洲

目に立て枯野に高き薨哉

、 逸甫

圍が香や素足つめたきぬくい椽

、 竜水

留主事を隣へかくす鯨汁

、 其洩

夕涼み浪打際を五六丁

、 李明

雪の日やどちへ向ても別世界

、 探翠

京を出て藁屋めづらし秋の風

、 李仲

田千丁月もくだけて落し水

、 墨後

鳥めはやつぱり黒き紅葉かな

、 とも

客留て蕎麦を挽く日の時雨哉

、 松華

そよりともせず青葉も暑かな

、 里静

最一丁行ばあてある清水哉

、 李朝

池水の小鮒にまじる紅葉かな

、 斧山

雨風に瘦て一重の野菊かな

、 知雀

山吹の花や踏こす滝詣

、 止水

秋風や逆羽入たる稲雀

、 松濤

惜みく戸を入にけり夏の月

、 喜扇

嵐かといふ間に門へしぐれ梟

、 松暁

く風に腰をのしてや田艸取

、 雨竹

屋根葺の禪も白し小六月

、 松翠

眼のさめた時風つよし啼千鳥

、 松栄

白雲のうごけばわかる桜かな

、 桃園

順礼の禁にくる、さくら哉

、 李徑

隱家の内も明るきさくらかな

、 桃伍

女にも下戸のみはなし紅葉狩
蜘蛛の囀に麦糠かゝるあつさ哉

交桂
直卿

紅梅や明星消べし朝ぼらけ

女
けん

」(十三)

春寒やまだ浦人も色白き

すて

紙燭して覗く夜長の時計哉

朝鶏

谷川やほたる吹出す夕嵐

少年
喜齋

埋火に鼻あぶる夜や啼千鳥

長流

大竹に庵はかくれて風薫る

松居

つくぐと見てわたりけり春の川

喜朝

出雲の国三刀屋なる克己庵主、^(十三)老の丈夫のたのみも
あらで、長月をはじめのひと日、終焉なりとの訃音におど
ろきて。

菊の香も穢土と倦てや帰る空

徐風庵

」(十四)

皇都寺町通二條

蕉門書林

橘屋治兵衛梓

(白紙)

」(裏表紙
見返し)

」(十四)

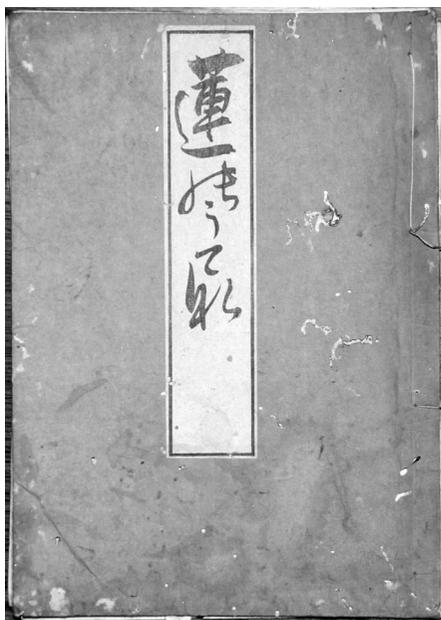
〈付記〉

本稿をなすにあたり、手銭家の皆様には特段のお世話に与りました。また、手銭記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教示を賜りました。また、難読箇所に関して、佐藤勝明氏から御教示を頂きました。記して感謝申し上げます。

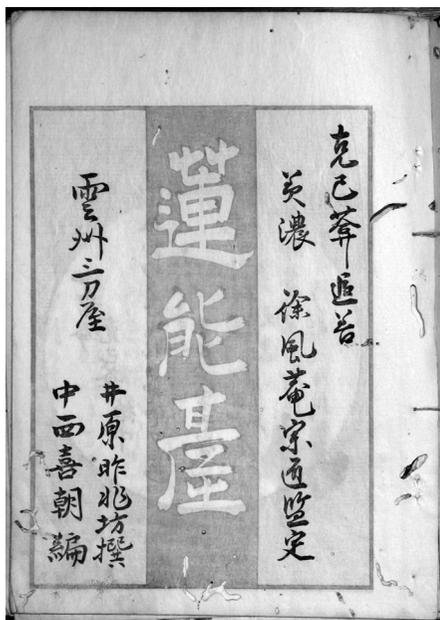
本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域の文学・歴史関係資料の研究と活用に関するプロジェクト」(二〇一九～二〇二一年度、代表・田中則雄)、科学研究費補助金(基盤研究(C))「化政期俳諧再評価のための新研究」(研究課題番号 18K00296 代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

〈参考図版〉

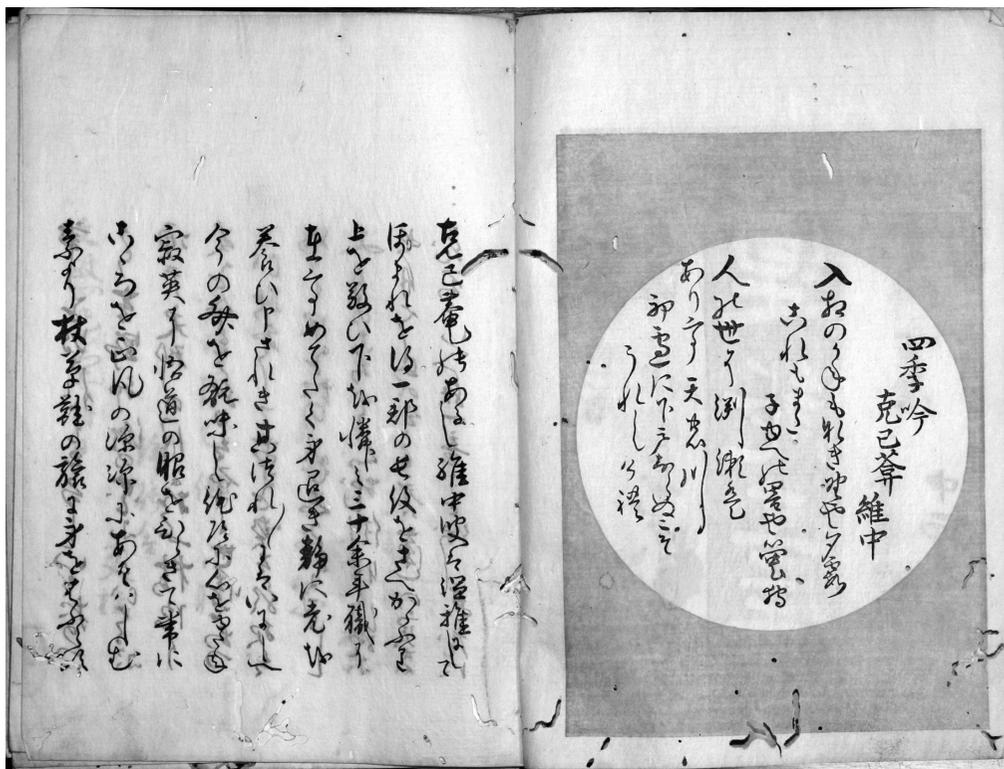
1. 表紙



2. 扉題(扉才)



3. 維中四季発句・交桂序文冒頭(扉ウ・一才)

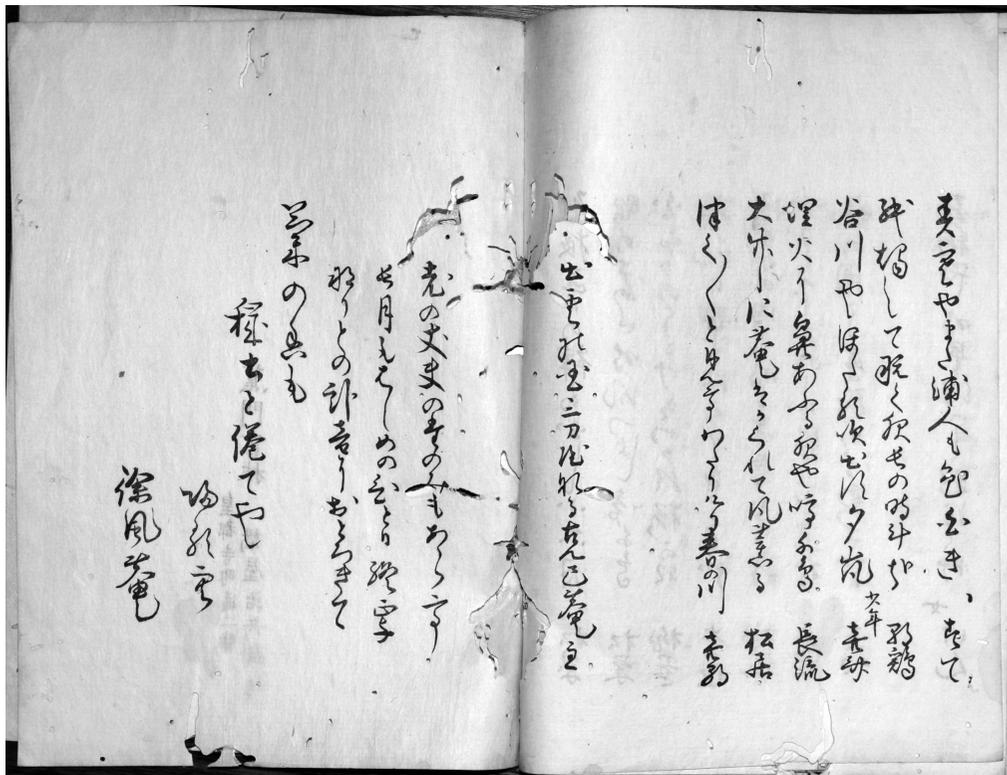


事、とゆはたはるしむたの
 ら、吉野御嶽の東ふらふらふ
 項、文神の月、たて、桂、松、松、
 友と命を、おれ、を、存、く、世、情、を、あつ
 く、い、徳、を、て、業、を、愛、を、お、れ、お、
 物、く、果、を、た、の、し、む、志、を、お、れ、お、し
 上、月、の、ま、ら、く、く、ん、地、例、は、は、は、
 せ、月、く、の、お、く、お、く、お、く、の、ま、ら、
 光、石、と、く、一、章、を、は、は、は、
 の、ま、ら、く、く、お、く、お、く、お、く、
 く、く、お、く、お、く、お、く、
 幽、明、天、地、の、つ、れ、お、く、お、く、
 一、句、と、お、く、お、く、お、く、
 あ、く、お、く、
 文、政、四、己、乙、未、月、
 洋、傳、會、
 文、桂、

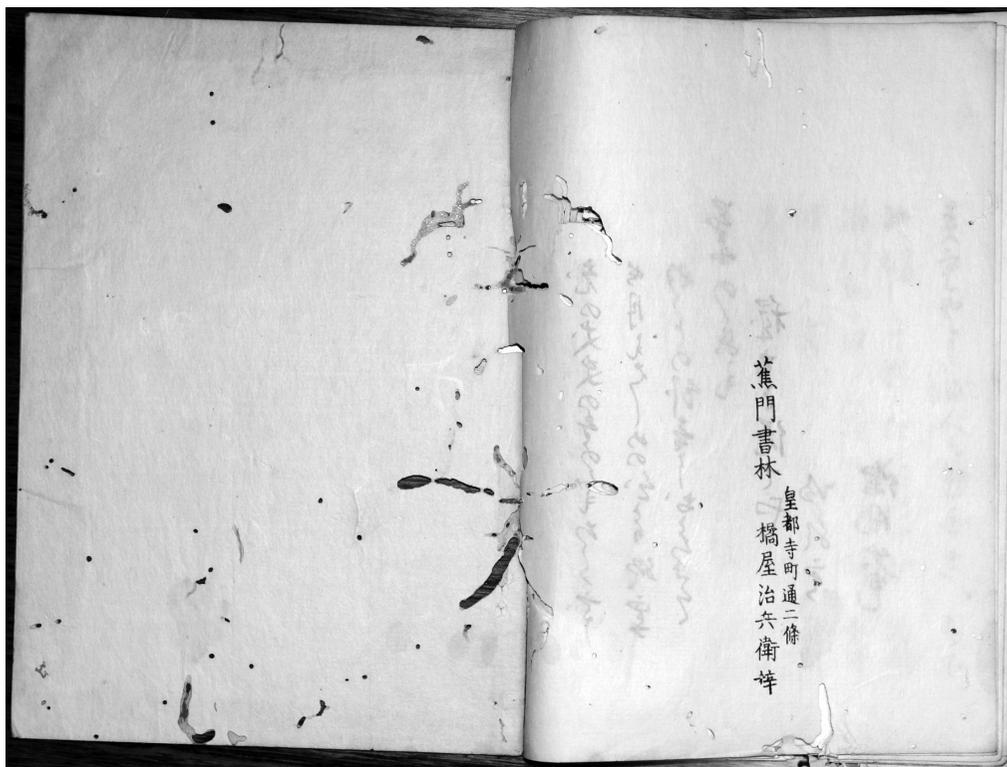
評世
 牙仙行 古人
 世、は、く、く、く、身、を、蓮、の、実、は、は、
 汲、り、お、く、お、く、お、く、
 色、も、も、も、お、く、お、く、
 ち、く、お、く、お、く、
 お、く、お、く、
 遠、く、お、く、
 火、は、く、お、く、
 端、は、く、お、く、
 刺、つ、く、お、く、
 出、つ、く、お、く、
 鳥、も、お、く、
 舟、波、お、く、
 浪、人、の、お、く、
 寺、川、お、く、
 松、林、
 李、林、
 里、神、
 李、林、
 谷、山、
 一心、
 知、桂、
 止、水、
 松、林、

克己庵維中追善集『蓮のうてな』—手鏡記念館所藏俳諧資料(十四)—(伊藤善隆)

6. 本文卷末・徐風庵跋(二三ウ・一四オ)



7. 刊記・裏表紙見返し(一四ウ・裏表紙見返し)



The memorial collection tribute to Kokkian-Ichu “Hasuno-Utena” : reprint and introduction —A study of Haikai literature in Tezen Family Archives (14)—

ITO Yoshitaka
(Rissho University)

[Abstract]

“Hasuno-Utena” owned by Tezen Family Archives is a memorial collection tribute to Kokkian-Ichu. Kokkian-Ichu was one of the most important haikai poets in Izumo area.

Keywords: Haikai, Minoha, Kokkian-Ichu, Mitoya, Tachibanaya Jihei, Tezen Museum